

昔は、敷居が高かった

1 高い敷居のこと

敷居とは、戸・障子・ふすまの下にあって、それをあけたてするための溝のついた横木とあるが(広辞苑)、ここでは、玄関の敷居のことについて書かせてもらおうと思う。それは、昔は、敷居が高かったということである。

昔から「敷居が高い」ということばがある。これは、広辞苑によると「不義理または面目のないことなどがあって、その人の家に行きかねること」とある。しかし、ここでとりあげる「敷居の高さ」のことは、全く建築構造上のことである。

次の写真は、最近まであった近所のお家の玄関である。玄関の戸は、板戸と障子の二重になっているので、敷居の幅も広く大きい。しかも、敷居の高さが地面から20cmくらいあった。



2 敷居にあがって叱られる

玄関であろうと、家の中であろうと、「敷居のうえに乗ってはならない」(乗るという表現は柳田国男さんの著書による)ということは、誰でも守らなければならない行儀

作法の基本ということになっていると思うのだが、(禁忌事項の習俗という見方もある) 幼児の頃の私には、このようなきまりは知る由もない。そこで、草履を履いたまま敷居にあがって中へはいると、そこのおばあさんに「こりゃこりゃ敷居はまたいで入るもんじゃが」とよく叱られたものである。幼い私には、敷居をまたぐことが簡単にできないのであったが、おばあさんはこれを許してはくれなかった。(わが家でも、玄関の敷居は同じように高かった。しかし、家ではたいてい勝手口から出入りしていた。ここは、敷居が高くなかったのだ。しかし、他家の勝手口から顔を出すことは、こども心にも気がひけた。勝手口は台所に通じるからである。)

3 今は、玄関の敷居も低くなった

つぎの写真は、新しく建てられた同家の玄関である。玄関の戸は、敷石に直に敷かれたレールの上を動くので、もう昔のような高い敷居はなくなってしまっている。そして、今ではこの地方の古い家でも、玄関だけは新様式に改造されていて、高い敷居はほとんど見られない。また、洋式の家では、玄関の戸もドア式になっていて、敷居も姿を消してしまった。

もう、こども達も、「敷居へあがった」と叱られることはないであろう。しかし、私には、叱られた昔がなつかしい。いまは、再び見ることのできなくなった家とともに。

「古い家のない町は、思い出のない人間と同じである。」というドイツの諺があるということだが、この町内では、土地区画整理などで、古い家は少なくなり、そして、思い出の川も橋もなくなってしまった。



平成10年10月号 第48号
(中 尾 佐之吉)